を経歴し、又三千日を剔て八曼陀羅香を焼、其間常坐三昧を修し、心神全く動ぜず。此外大峯に修行して三箇年を送る、自余の少行委く記すに遑あらず。又我父夢中に来り告て云、汝常に山林にあるべし、敢て聚洛に交る事なかれ、於戯山林の睡眠は如来これを讃嘆給ひ、聚落の苦行は菩薩これを詆訶給ふ。誠哉斯言。于時久寿三丙子年仲春二日、仏子西念聊由縁を記して来葉に貶す也。

少納言入道（法名信西）

乳石〔当山門前より南十六町ばかりにあり、此所幽谷にして人跡稀なり〕石の状表平にして、裏の方に乳房十四箇所、おの〳〵乳頭の貌あり、婦人の乳の如し。其乳頭より乳水悉く滴り落るなり。乳なき婦に此乳水を飲せば忽乳汁出るとなり。一年若狭国の者此所へ来り、岩の乳房を砕て家に持かへりしに、忽悩乱して大いに祟をなすこれによつて此所へ返し置きける。其乳房石此岩上にあり。当山に於ては乳岩明神と崇め、護法神とす。華表は乳石より一町ばかりこなたにあり。都て此深谷嶮岨にして樵夫も歩しかね、不知案内にては見る事協ひがたし。乳石谷二町ばかり入と三本杉といふあり、大木にして又類稀なり。

本草綱目には石鍾乳とあり。〔凡同類と見えたり、又別種か後考あるべし〕石鍾乳の説区々ありと雖も、其一二を摘んで此に挙る。石鍾乳は大山の深谷に生ず、石の津気鍾聚て乳となる、又滴溜て石となる、故に石鍾乳と号く。